

先祖代々受け継いできた「伝統の美」 同世代に伝え、次世代に残すために9人の美術家が手を結ぶ。

かつてはジャポニズムがヨーロッパを席卷していた。しかし今、日本の伝統的な美術は、総体としての輝きを世界に伝え切れていない。それを打開するために手を結んだ9人の美術家がいる。その活動はやがて日中韓の文化交流へと進化していく。

今の日本の美術をヨーロッパ人はまったく知らない。

1998年～99年、東京藝術大学美術学部教授の三田村有純さんはベルギーに留学していた。そこで他の美術家と交流しているうちに、あることに気がつく。ヨーロッパの人々は、現在の日本の美術や工芸を理解していないのだ。「というよりも、日本側がこれが今の日本の美術だという情報をまったく発信していないんですね」と三田村さん。

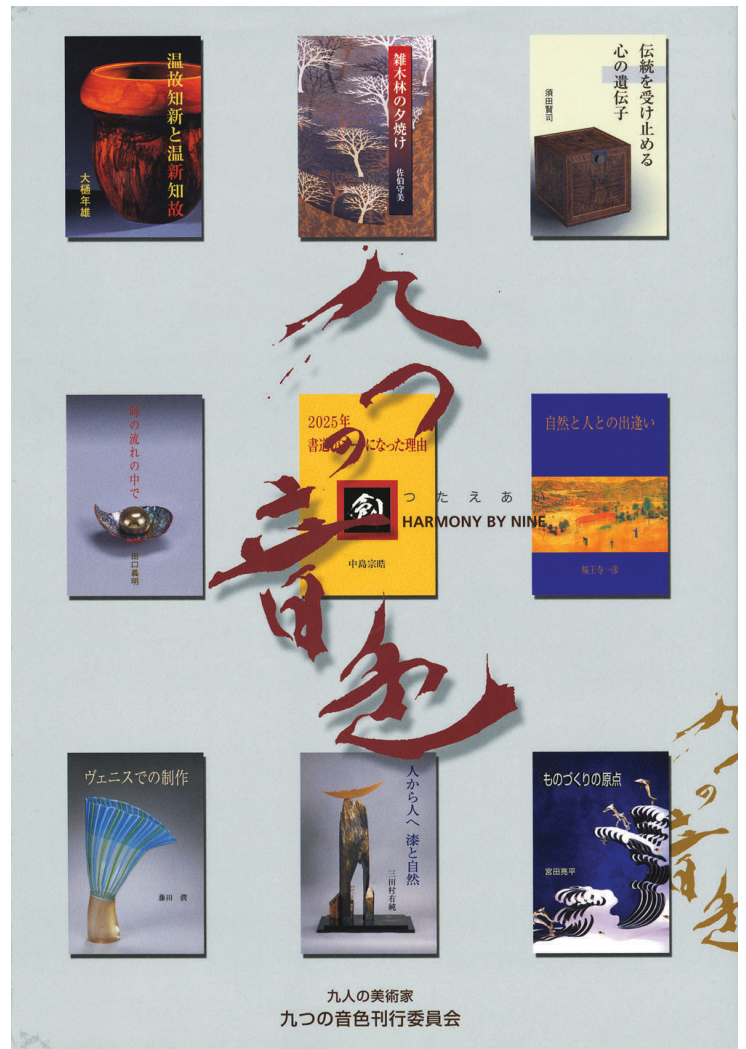
そこで三田村さんが結成したのが「美術運動体 九つの音色」という活動グループである。三田村さんが声をかけたメンバーは、当時、他の8人はお互いに面識はなかったのだが、ある共通点があった。

「先祖代々、その仕事を継いできている方を集めたのです。日本では特に工芸などでは、一子相伝というように、何代にもわたって受け継がれていく場合が多いわけですね。これは世界的に見ても珍しくて、きわめて日本らしい制度なんです」

そうした美術家が有しているものは、一代限りの感性や技術ではなく、凝縮され高められているというのが三田村さんの考えである。

「どうしても今の日本を切り取って表したかったんですね。ただ今の日本といっても、そこに至った流れというか、根っこがあるわけで、それも含め、総合的な日本を紹介しないと理解されないと思ったのです」

今の芸術の概念が、個人性を重視しすぎているため、このままでは「日本の美の本質」をも見失うという危機感も



9人の作品がまとめられた図録 「九つの音色 つたえあい」

あったという。三田村さん自身が十代続いてきた美術家であるからこそ、感じとったものだろう。

日本の美術紹介の活動が 日中韓の文化交流へ発展。

こうして2000年に結成された「美術運動体 九つの音色」は2001年から国内展覧会、国際展覧会、シンポジウムを開催し、展覧会と同名の本を出版してきた。

「世界に発信するのであれば国際展覧会は必要ですし、

九つの音色メンバー（五十音順）

大桶年雄	陶藝
佐伯守美	陶藝
須田賢司	木工藝
田口義明	漆藝
中島宗皓	書
福王寺一彦	日本画
藤田 潤	硝子工藝
三田村有純	漆藝
宮田亮平	鍛金



三田村有純氏作品
「重ねられた刻」



九つの音色はこれまでに韓国と中国において展覧会や講演会を通じた交流事業を展開している

より多くの人に知っていただくためには、やはり継続性のある印刷物が必要なんです」

印刷物は今回で4冊目を数えるが、毎回テーマが設けられている。第1回は「父の背を見て」、第2回は「再美日本」、第3回は「藝術の対話 中国 韓国 そして日本」となっている。

第1回のテーマはこの活動をそのまま表現したものが、第2回は中国と韓国からも9人ずつの美術家が参加し、それ以降、日中韓の国際文化交流という色彩が色濃くなっている。文化的に近い隣国たちに理解されないようであれば、ヨーロッパに理解されるはずがないという感触があったのかもしれない。

AJOSCが助成を行った2007年度の第4回は「美と心〜つたえあい〜」がテーマになり、韓国6大学、中国3大学でシンポジウムなどが行われた。参加した学生からアンケートもとった。辛辣な意見も当然あったが、日本を再発見することができたという声が多かった。

「文化に国境はないんですね。だから素直に意見が返ってきます。私が日本の文化には『間』というのがあるというのと、『それなら私たちにもある。どこがどう違うんだ?』という質問につながる。似ているからこそその違いというものも浮かんでくるわけです。それが次の課題になりますし、本当の文化交流だと思うんです」と三田村さんは嬉しそうに語った。

また、中国や韓国の美術を数多く知ることもできた。「九つの音色」のメンバーの多くは教職にもついているので、それを日本の学生に教えて、知識と理解の輪を広げることができる。

こうして9人は大きな成果をあげてきたが、10年前と比べ、それぞれが重責のある立場になったため、全員が集まるといえることができなくなった。

「いずれ解散となると思いますが、なんとかヨーロッパ、アメリカ、そして国内の3回はやりたいと思っています」

初期の目的であるヨーロッパへのアプローチを図り、アメリカでは次世代の日本を紹介し、国内で幕を閉じるという構想だ。実り多き活動であるだけに、その間に9人の意志を継ぐ若い世代が現れることを期待したい。

●担当者より

出版物や資料映像づくりにたいへん役立ちました。



2007年はAJOSCさんの助成によって、日中韓という舞台で大きなイベントを開催することができました。心より感謝いたします。特に今の日本美術や工芸を伝えるデジタル映像を作成して上映したのですが、両国からもたいへん高い評価をいただきました。また出版物も満足のいくものになりました。これから先も資料として残り、日本の美を語り続けてくれると考えています。

東京藝術大学 美術学部 教授 三田村有純さん